短縮，QOL の向上，在宅療養のサポート体制の整備などがあげられる．当院で外来化学療法をうけている患者数をみてみると，開設前 1 年では 1183 件であったが，開設してからの一年で 1899 件となり大幅な伸びを示している．このように外来化学療法を受ける患者は今後も需要に伴い増加することが予想される．それは患者にとって自分のライフスタイルを維持し，社会生活を営みながら治療が出来るなどの利点もあるが，副作用に伴う身体的・精神的苦痛に関して患者自身が対処していかなければならないことになる．通院点滴療法室はこのような治療過程にある患者が，より安全で確実に治療が受けられるように支援する役割を担っており，当療法室は

1）点滴注射での化学療法を受ける患者さんに，安全・安心してより快適な環境で治療をうけていただく
2）外来化学療法加算（400 点）の増収

を目標に業務を行っている．この一年でチームで取り組んだ主なものはタキソールの前投薬の統一と乳腺ルチーン検査時の時間調整であった．

Ⅱ．通院点滴療法室の看護

通院点滴療法室の看護の目標は

1）外来化学療法を受ける患者が，安心して，安全に治療が受けられる
2）患者個々の生活を尊重しながら，レベルや環境に応じた指導をする

である．1 ヶ月程度の開設準備期間であったため，それまで各科でおこなっていた方法をまとめることは容易ではなかった．まず安全・確実に投与するという目標を第一に取り組んだ．各科の化学療法が一度に集まってみると，同じ薬剤でも前投薬の方法や投与方法が違うなど，実施にあたりエラーを起こしやすい状態であった．そこでチームとしてリスクマネジメントの観点，コストの観点より前投薬の統一について取り組むことにより，現在は改善され，時間を患者指導にあてることができてきている．

外来は病棟と異なり，患者とは非常に短い時間でかかわることを余儀なくされているため，短時間で効率よくポイントを押えた患者教育が必要とされ，治療後の患者の生活を予測・判断していくことが求められる．現在は次のステップとしてこの患者指導に取り組んでいる．診察の前の採血・ルート確保を通院点滴療法室で行い，前回の治療後の自宅での生活と副作用の程度をアセスメントし，診察時に Dr. に伝えるべき副作用の症状や表現方法について患者に指導している．

Ⅲ．今後の課題

個々にあわせた看護を提供するために，一回ごとの治療ではなく継続的に患者の状態を把握し，治療期間を通して患者が「自己効力感」を持てるようにかかわっていくことが必要であることも，患者の経過をみていて感じている．今後は各科外来，病棟，緩和委員会等とも連携をとり，看護を深めていきたいと考えている．

通院点滴療法室開設から 1 年経過報告Ⅱ
～ 薬剤師の立場より ～

薬剤部　**祖父江　彰**

近年，DPC の導入や新しい抗がん剤の開発などにより外来での抗がん剤治療が盛んに行われている．また，病院側の都合だけでなく，患者側としても外来で抗がん剤治療を受けられるということは入院での治療に比べ精神的な負担も少ない．そこで当院でも外来点滴療法室を立ち上げることとなった．

今まで行われていた薬剤部での注射の混注業務は CV の混注のみで抗がん剤の混注は初めてであり戸惑うことも多かった．

薬剤部での混注にあたり，「安全」「迅速」「正確」なミキシングを目標としている．「安全」に関しては患者の安全はもちろん，細胞毒性のある抗がん剤を扱う医療従事者の安全も配慮しなければならない．投与量に関しては 3 回のダブルチェックを行っている．ミキシングに関しては安全キャビネットの使用により，抗がん剤の無菌的で被ばくの少ないミキシ

ングを行っている．また副作用チェックや麻薬の服薬指導なども行っている．「迅速」に関してはタキソールのプレメジの統一などによりミキシング時間の短縮を行った．「正確」に関しては泡立ちやすい薬剤，難溶性の薬剤，過量充填されている薬剤など薬剤の特徴と捉えた正確なミキシングを心掛けている．

入院の抗がん剤のミキシングや服薬指導が十分にできていないなどがあり今後の課題である．

入院時持参薬管理実施状況

薬剤部　神谷令子

Ⅰ．はじめに

入院時に患者が持参した薬の内容を正確に把握することは，入院後の治療を安全に進めるうえできわめて重要である．平成16年末に他施設で持参薬が関連した重大な医療事故が発生しており，このような事故を防ぐため，平成19年1月より薬剤師による入院時持参薬管理を開始した．

Ⅱ．方　法

予約入院で持参薬のある患者と面談し，薬剤を確認しながら，服薬状況や副作用歴・アレルギー歴等のインタビューを行う．患者から持参薬を預かり，薬剤とインタビューの内容及びハイリスク薬の指摘，医師・看護師に伝えるべき内容等を「入院時持参薬指示表」に記載し，預かった薬剤と共に病棟に上げる．薬剤管理指導料を1回のみ算定する．

Ⅲ．実施状況

実施率は予約入院患者のほぼ6割で，薬剤管理指導件数増加にも寄与している．

Ⅳ．結　果

持参薬管理を行うことにより種々の問題点が発見された．内容に関するものとしては術前の抗血小板薬投与，複数の医療機関での重複投与，相互作用，用法指示の不十分，調剤ミスなど，患者側の問題点としては，服用法の誤りや自己調節，保管法の不適，食物との相互作用などである．また，当院採用薬剤への切替の際にも問題が発生する可能性がある．

Ⅴ．まとめ

有効な薬物治療の継続や，ＤＰＣに関連する経済的メリットなどの理由から，持参薬の使用が増えている．しかし，持参薬には前述のように様々な問題がある．これらの問題が継続されるのを防ぎ，安全な医療を提供するために，持参薬管理に薬剤師が係ることは重要な意味があると考える．

移植医療について
～院内移植コーディネーターの役割～

院内移植コーディネーター（臨床工学課）　田形勝至

当院は静岡県より臓器提供推進モデル病院に指定されている．このモデル病院には静岡県より任命された2名～3名の院内移植コーディネーターが活動を行っている．院内移植コーディネーターの役割は，臓器提供者（ドナー候補者）が発生した時に，医療者側とドナーとその家族に対し中立的な立場で公平に関わり，移植が適正かつ円滑に行われるようにコーディネートをすることや，腎臓移植希望者（透析患